

エビデンスに基づく看護実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院看護学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, あゆみ メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180403-117

エビデンスに基づく看護実践

河野あゆみ

Ayumi Kono

1. エビデンスに基づく看護実践：Evidence Based Nursing (EBN)

1) エビデンスに基づく看護実践の定義

エビデンスに基づく看護実践 (Evidence Based Nursing EBN) とは、EBM (Evidence Based Medicine) などともに1990年代に普及してきた考え方であり、療養者や住民などの看護の対象者に看護ケアを提供する際に、その時点で最も新しく、最も良いエビデンス (事実や証拠) を丁寧に吟味し、看護実践の判断を決定する問題解決型アプローチを意味する。その過程には、看護実践家や対象者の価値観や指向性に沿って、「看護実践上の疑問」 (clinical question) に答えることができるように、最適なエビデンスを系統的に探し、批判的に吟味する (critical appraisal) するという作業が含まれている。

一般的に、EBNには、「研究等からのエビデンス」のみに基づいて行われるというイメージがあるが、厳密に言えば、それ以外に、「看護の対象者の価値観や指向性に関する情報」や「医療・看護の専門的知識や技術」、「対象者の今までの経過や検査結果、ヘルスケアに関する社会資源の活用可能性」などを考慮に入れて、臨床的判断を行う。ここでは、特に「研究等からのエビデンス」をどのように看護実践に活用していくべきなのか、今後の課題も含めて論じたい。

2) エビデンスの水準

通常、エビデンスには下記の7つの水準があるとされており、これらのエビデンスの水準に応じた実践の推奨のレベルが設定されている。

3) エビデンスの活用

エビデンスの活用方法の具体例としては、次の手順で行う。まず、ある患者等に看護実践上の疑問をもった場合、

最初にエビデンスを探してみる (研究の検索)。その疑問を直接扱った論文がない場合、疑問点の解決の要素となる個別データを収集し、最も望ましい実践上の判断を行うように分析する。一方、その疑問を直接扱った論文がある場合は、それらの研究論文を批判的に吟味する。研究論文を吟味した後、結論が一定していないと考えた場合は、メタアナリシスを行う。反対に、結論が一定していると考えた場合は、研究論文の結論を自分の目の前にいる患者に適応できるか、判断を行う²⁾。

2. 看護実践家の研究リテラシーの実態

エビデンスの活用には、研究のリテラシー (リテラシー：読み書きする力)、つまり、研究を理解する知識や技術が必要である。筆者らは、看護実践の場で、看護研究を推進する上で、重要な役割をとっている専門看護師164人、認定看護師180人、病院の担当看護師125人を対象に、研究リテラシーの実態を把握する調査^{3,4)}を実施した。具体的な調査内容は、看護研究やEBNに関する知識やスキルの達成度についてである。

その結果、調査対象の80%以上の看護師が「研究は医療や看護の改善に役立つ」と考えていたが、「データベースを使用して、研究論文を検索したり、批判的に吟味する知識や技術がある」と思う者は半分程度であり、「研究論文のエビデンスを実践に活用できる」と考えている者は60%であった。看護研究実施に関する具体的な知識や技術では、「倫理的配慮ができる」ことは26.1%、「学会での発表方法がわかる」ことは17.8%の看護師が「十分に達成している」と考えていたが、その他の知識や技術については、「十分に達成している」者の割合は5%程度以内であった。

以上より、看護職は、研究からのエビデンスを看護実践に活用する (EBN) ことの重要性はみとめているが、

実際の研究遂行の知識や技術の達成度が非常に低いと考えられた。

ムが必要であり、これらについては、主に大学院での教育課程が重要な役割を担っていると考ええる。

3. エビデンスに基づく看護実践が普及するための課題

今後、EBNが普及するための課題としては、以下の点が考えられる。

第一に、エビデンスを知っていることがすなわち、エビデンスに基づく看護実践を行うことと同じではないため、研究を看護実践にトランスレイト（翻訳）する取り組みの必要性がある。これらには組織や制度的な対応の他、看護医療職や患者・住民の研究への認識も改革する必要がある。

また、看護系教育課程や現任教育において、EBNに関する知識・スキルを育成する教育プログラム、つまり、①エビデンスを探し、批判的に吟味すること、②エビデンスを実践に活用できること、③看護実践に活用できるエビデンスを作成できることなどを含んだ教育プログラ

参考文献

1) Melnyk BM, Fineout-Overholt E. Evidence-based practice in nursing & healthcare: A guide to best practice. Philadelphia: Lippincott Williams &Wilkins, 2005.

2) 阿部俊子編. 看護実践のためのEBN. 東京：中央法規, 2001.

3) 河野あゆみ、萱間真美、グレッグ美鈴. 専門看護師、認定看護師、教育担当看護師における臨床看護研究の教育ニーズの実態. 日本看護学教育学会誌17(2)：31-40, 2007.

4) 福原俊一. 平成18年度厚生労働科学研究臨床研究基盤整備推進研究総括・分担研究報告書臨床研究フェローシップ構築に関する研究. 2007.

表1 エビデンスの水準

水 準	内 容
レベル1	関連する複数の無作為化比較研究を検討したメタアナリシス またはシステマティックレビュー
レベル2	緻密にデザインされた無作為化比較研究 (介入群と対処群を割り付ける時に無作為化を行う実験研究)
レベル3	緻密にデザインされた比較研究 (介入群と対処群を割り付ける時に無作為化を行わない実験研究)
レベル4	緻密にデザインされたケースコントロール研究やコホート研究
レベル5	記述研究や質的研究のシステマティックレビュー
レベル6	記述研究や質的研究
レベル7	専門家委員会などの報告や見解

文献¹⁾ p10, box1.2.を訳